



秋の気配に包まれてきた今日この頃です。百人一首の秋の代表作のひとつが「奥山に ^{もみじ}紅葉踏み分け 鳴く鹿の 声聞くとときぞ 秋は悲しき」ですね。秋のものの悲しげさを演出するシカの声ですが、皆さんは聞いたことはありますか。今回のジオフィールドではニホンジカを取り上げます。

1. 山陰海岸ジオパークのシカについて

日本に生息するニホンジカは、エゾシカやキュウシュウシカなどの6種の亜種に分類されます。山陰海岸ジオパークエリア内に生息するのはホンシュウジカとなります(写真 1)。ここではニホンジカと統一します。シカといえば、カモシカもいますね。ニホンジカと同じ偶蹄目に分類されますが、実はウシに近い仲間で、2018年度の環境省の調査ではジオパーク内の生息は確認されていません。ニホンジカはシカ科に属しますが、カモシカはウシ科です。ニホンジカの角はオスにしかありません。そして、毎年生え変わります。カモシカはオスもメスも角があり、生え変わることはありません。外見上の大きな違いがもうひとつ、おしりが白いのがニホンジカです。ふさふさの白い毛がかわいいですね。さらに違いは、保護管理に関することです。カモシカが国の天然記念物に指定され、保護されているのに対して、ニホンジカは全国各地で捕獲が行われています。



写真 1. 海と大地の自然館に現れたニホンジカ (当館では度々、姿を見せています。)

2. ニホンジカの生活史

それではニホンジカ(以降、シカと省略)はどのような生活をしているのでしょうか。本来は草原性の動物ですが、植林地など森林帯でも生息をしています。また、人里や人慣れをすると奈良公園のシカのように街中にも適応します。シカの食べ物という鹿せんべいを思い浮かべる方もいるでしょうが、シカは草食動物です。

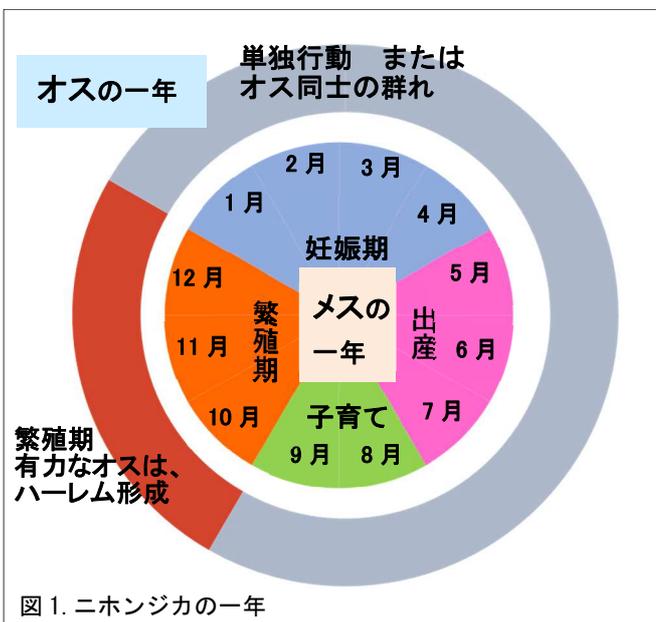


図 1. ニホンジカの一年

植物の葉、芽、樹皮、果実が食べ物で、例外はありますが、何でも食べるというよいでしょう。メスは群れで生活をしますが、オスは満1歳を過ぎると独り立ちをしていきます。若い雄同士で群れることもあります。メスも栄養状態がよければ満1歳の秋には妊娠をします。そして、翌春には出産をします。ほぼ毎年、1頭を出産します。野生でも10年以上、生きるシカもいます。日本の女性が一生のうちに産む子どもは1.34人ですので、とても繁殖率の高い動物であることがわかります。秋の繁殖期、オスが縄張りやメスへのアピールのために鳴きます。この声が、冒頭の百人一首に出てくる声の正体です。そして、有力なオスがメスの群れを囲い込み、ハーレムを形成します。それにしても、図1からも分かるようにシカのお母さんは、子育てに一生を捧げます。すこ

いですね。実はこの高い繁殖能力に加え、人間社会の影響でシカの生存率が高くなり、生息数は爆発的に増加しました。そして、私たちの生活に様々な問題を生じさせています。

3. どうしてシカが増えると問題なのか？

そもそも、どうしてシカが増えているのでしょうか。中山間地帯では人口の流出により下草刈りが行われず、耕作しない畑や田んぼは放置されました。このことはシカのエサ場を作っていることとなります。栄養状態がよければ性成熟も早まり、子シカの生存率も高めます。ハンターの減少も要因のひとつとも言われています。日本には天敵もいません。地球温暖化は、積雪にも影響しています。積雪が減れば、冬でもエサ(草等)が得やすく、雪で命を失うこともなくなります。温暖化は人間活動による二酸化炭素の排出も原因とも言われています。もともとの繁殖力の高さに加え、私たちの生活がシカの生存率を高めたことにより増えていると考えられています。



写真2. シカの食べあと
(鳥取県岩美町 湿原のカキツバタ)



写真3. シカの食あとと ディアライン
(シカの届く範囲の葉が食べられる。)



写真4. シカが草等を食べつくした森林
(鳥取県 扇ノ山)



写真5. 絶滅危惧種の植物保護
(鳥取県 扇ノ山)

増えたシカがエサを求め作物や苗を食べて農業・林業被害を起こします。これは各地で大きな問題となっています。そして、シカは群れで行動することにより森を食べつくしていくと言ってもいいでしょう(写真2、3、4)。その森林は、見通しのいい手入れされているように見えるかもしれませんが、しかし、シカが好まない数種の植物が目立つ寂しい森林となります。生物多様性に大きな問題を起こしているのです。シカは絶滅危惧種の植物もお構いなしに食べてしまいます(写真5)。影響は植物だけではなく、その植物に依存している昆虫や鳥など他の生きものにも及びます。森林の生きもの全体の多様性の低下が危惧されています。それだけではなく、さらに地面がむき出しになった土壌は保水力を失い、土砂災害にもつながります。実際に東京の奥多摩では土壌流失が起こっています。山陰海岸ジオパークも他人事ではありません。シカの増加は、実は身近な問題につながっているのです。

4. どう向き合うか

増え過ぎたシカとどう向き合ったらよいのでしょうか。ひとつは、シカの個体数管理です。シカを捕獲して生息数を減らしていく取り組みが各地で行われています。そして、捕獲したシカをジビエとしての活用も始まっています。それでも、森林の裸地化に追いついていません。一方的にシカだけを管理するのではなく、シカのレストランとならないように奥山も里山も管理をしなければなりません。かつて手入れされた里山は野生動物と人間社会の境目の場所となっていました。柵などで農林業被害を防止するとともに、この場所がエサ場とならないように土地を活かして人のにぎわいが戻ると違ってくるかもしれません。シカの急激な増加は、大地と人との関係や生物多様性の問題を問いただしているように思えるのです。(笠木幸枝)

《主な参考資料》ヤマケイ新書 シカ問題を考える バランスを崩した自然の行方 高槻成紀
鳥取県第二種特定鳥獣(ニホンシカ)管理計画 平成29年4月